

山梨県北巨摩郡白州町

屋 敷 平 遺 跡

台ヶ原地区農工団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

1991

白州町教育委員会

山梨県北巨摩郡白州町

屋 敷 平 遺 跡

台ヶ原地区農工団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

1 9 9 1

白州町教育委員会

序

この報告書は、台ヶ原地区農工開拓地造成工事に伴い、発掘調査された屋敷平遺跡の調査結果をまとめたものであります。

屋敷平遺跡は、古くからその存在が知られ、昭和58年の遺跡分布調査の際にも町内において最も古い時代の遺跡であり、また大規模な館跡の可能性を持つと報告されています。

今回の調査においては、館跡の存在は確認されませんでしたが、出土した内耳土器などからも、本遺跡が中世の人々の活動の拠点であったことがわかりました。また、町内で最も古い土器の発見や、弥生時代の切痕の残された土器など、町内のみでなく山梨県の歴史を知る上にも、貴重な資料と言えましょう。

最後に、本発掘調査報告書の発刊にあたり、山梨県教育庁文化課の皆様をはじめ、調査に参加、協力していただいた方に衷心より御礼を申し上げ、この報告書の序といたします。

平成3年12月

白州町教育委員会

教育長 道村初夫

例　　言

1. 本書は、台ヶ原地区農工団地造成工事に伴って発掘調査された、山梨県北巨摩郡白州町に所在する屋敷平遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、農地開発公社の委託を受けて、白州町教育委員会が行った。
3. 本調査の出土品、諸記録は、白州町教育委員会で保管している。
4. 本書の編集は、杉本が行った。
5. 土器の復元、実測は込山が、拓本、断面実測は川崎が行った。
6. 航空写真測量を、株式会社バスコへ委託して行った。
7. 発掘調査及び本書の作成にあたり次の諸氏に御教示いただいた。記して感謝いたします。
伊藤恒彦、小野正文、小瀬忠秋、坂本美夫、末木 健、中山誠二、新津 健、保坂康夫、
武藤雄六、和田 豊
(敬称略 五十音順)
8. 本調査にあたり、山梨県教育庁文化課及び台ヶ原地区の皆様に御理解、御指導をいただいた。心から謝意を表する次第です。

調　　査　　組　　織

調査主体　白州町教育委員会（教育長　道村初夫）

事務局　有賀祥司（課長）、山本賢二、坂本正明（係長）、古屋明美、白砂文香

調査担当者　折井 敦、杉本 充

調査参加者　小池佐津枝、山寺あやめ、細田逸子、細田豊子、小尾やすこ、細田キクエ、
小池孝子、細田みき江、高見八重子、鈴木治次、細田徳子、清水 保、
鈴木千代子、向井澄江、飯塚清子、小池鈴子、中村ソノエ、堀田好子、
小尾つる代、清水明治、飯塚八郎、細田洋子、込山真砂子、山本静枝

整理参加者　川崎東洋雄、込山裕代

目 次

序

例 言

目 次

| | |
|---------------|---|
| I 調査の経過と遺跡の概観 | 1 |
| II 遺構と遺物 | 4 |
| III まとめ | 9 |

挿 図 目 次

| | |
|--------------------|---|
| 図 1 遺跡の位置と周辺の中世の遺跡 | 1 |
| 図 2 調査区全測図 | 2 |
| 図 3 溝状造構平面図、断面図 | 3 |
| 図 4 造構外遺物① | 5 |
| 図 5 造構外遺物② | 6 |
| 図 6 造構外遺物③ | 7 |
| 図 7 造構外遺物④ | 8 |

図 版 目 次

| | |
|------|-------------------------------|
| 図版 1 | 調査区全景 |
| 図版 2 | a. 遺跡遠景 b. セクションB（前）セクションA（後） |
| 図版 3 | 縄文時代早期～中期の遺物 |
| 図版 4 | 縄文時代晚期～弥生時代の遺物 |
| 図版 5 | 石器、古銭 |

I 調査の経過と遺跡の概観

台ヶ原農工団地建設に伴い、台ヶ原屋敷平、字古屋敷の約50,000m²が開発される予定となつた。この予定地内には「大規模な館跡の可能性がある」と白州町誌にも報告されている屋敷平遺跡があり、白州町教育委員会では、平成2年4月に遺物分布調査と試掘調査を行つた。

その結果、遺物の分布範囲は34,000m²、遺構の存在の可能性がある面積が20,000m²と確認され、そのうち約9,500m²を工場建設工事のため、平成3年4月19日から5月24日まで本調査を行つた。

本遺跡は、釜無川とその支流である尾白川に挟まれた標高670m程の平坦な台地上に位置する。釜無川の左岸には「七里ヶ岩」があり、尾白川の右岸には中世の砦が置かれた中山がある。中山の周辺には、屋敷平、古屋敷、根古屋、陣ヶ原などの小字名が残っている。調査は採集された内耳土器片などから、中世館跡の発掘を目的として行なわれた。

調査区域内の土地利用は果樹園がほとんどであり、調査はまずぶどう棚と地中に埋設された給水管を取り除く作業から始めた。検出された遺構は溝状遺構1本のみであり、試掘調査で検出された土坑や石組などは本調査において確認できなかつた。

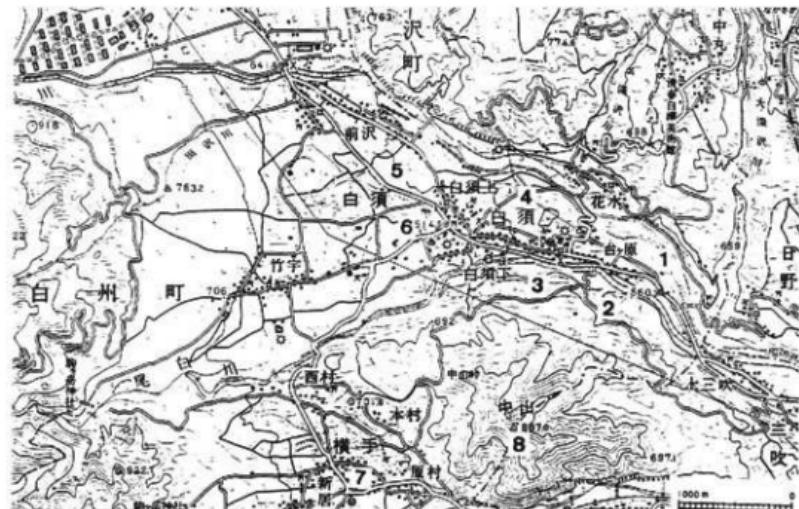
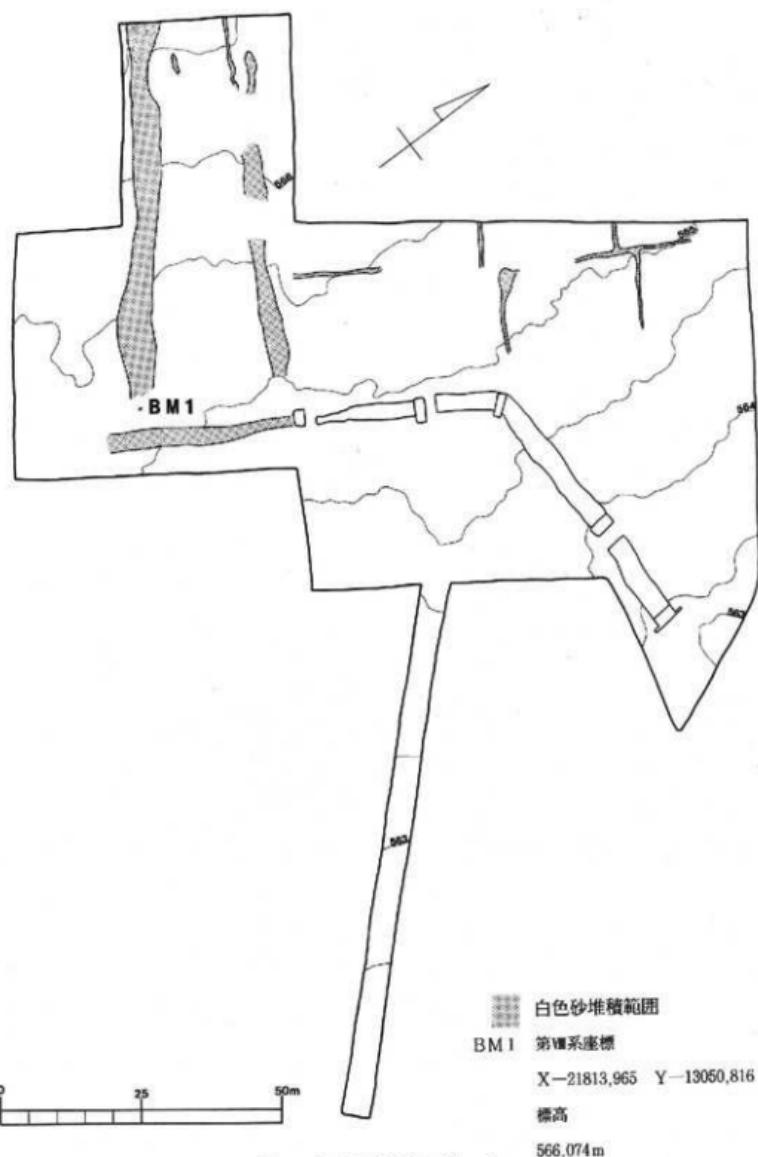


図1 遺跡の位置と周辺の中世遺跡 ($1/50,000$)

- | | | | |
|----------|----------|-------------|----------|
| 1. 屋敷平遺跡 | 2. 根古屋遺跡 | 3. 陣ヶ原1.2遺跡 | 4. 大久保遺跡 |
| 5. 坂下遺跡 | 6. 馬場氏館跡 | 7. 横手氏屋敷跡 | 8. 中山砦 |



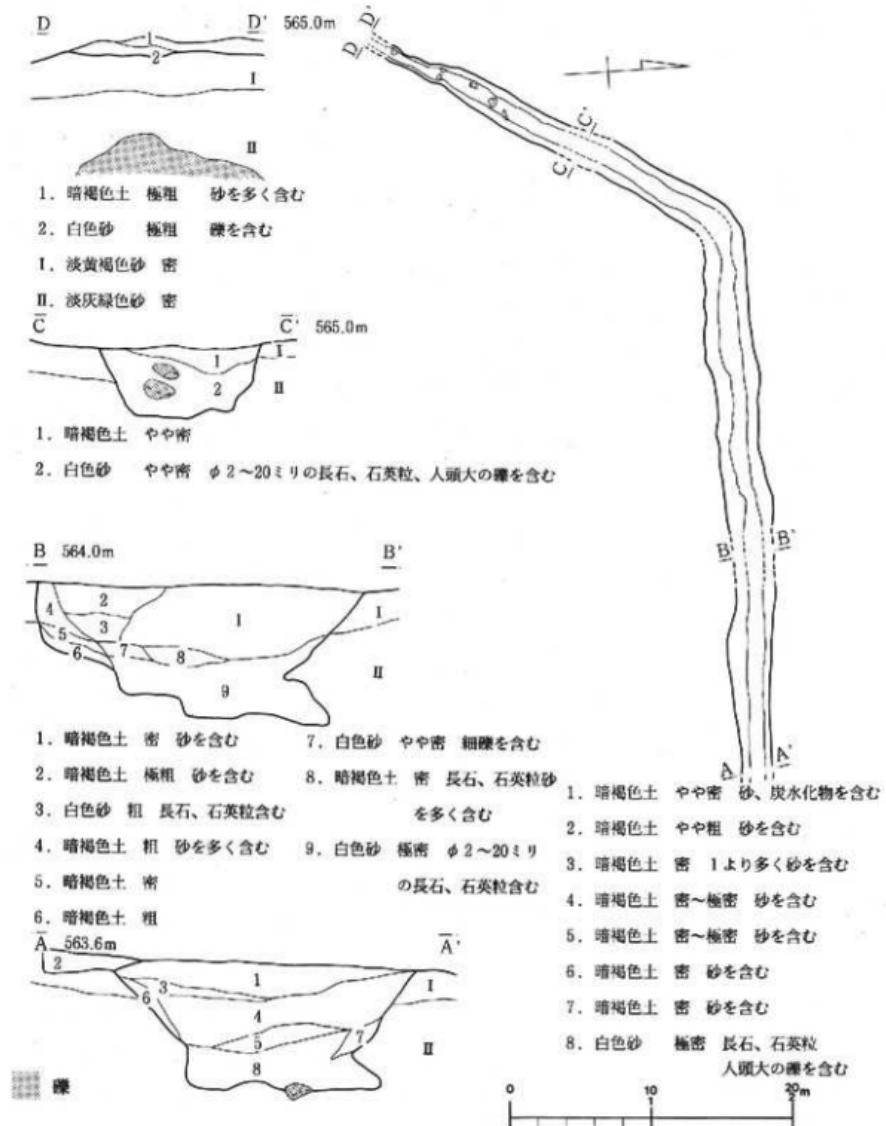


図3 溝状遺構 平面図 ($1/600$) 断面図 ($1/60$)

II 遺構と遺物

溝状遺構

調査区域中央から北東方向に30m、東に向かって50m程延び調査区域外へ続いている。東の延長線上にある釜無川に面する台地の淵は、地形図においてもえぐられているのがわかる。南北の延長線上には、下層の覆土と同じ砂礫が堆積している帯が40m程延びている。この砂礫の堆積は溝状遺構が耕作のため破壊された痕跡ではないかと思われる。同様の堆積が溝状遺構の西側にみられたので、図2調査区全測図にスクリーントーンで示した。覆土は、上下2層に大別できる。上層は砂を含む粘性のまったくない暗褐色であり、下層は人頭大までの礫を含む砂礫層である。地山はI、II層とも砂礫層だが、I層は腐植の浸透により淡黄褐色を呈している、II層は淡灰緑色を呈する。

出土した遺物は、縄文時代中期前半の上器片2点と弥生時代中期の土器片1点を除き中世に属する土師質土器、内耳土器、青磁、天目茶碗、ひで鉢、径10~15cm程とおもわれる繩の羽口片(3,200g)、鉢澤(3,790g)が出土している。土師質土器のなかには、鍛冶に使われたと思われる須恵器のような灰色に焼けたものや、ガラス分が付着したものがあった。

遺物の大半は、覆土上層の最下部から出土している。遺物は、小片で磨耗しているものが多く、図示できなかった。

遺構外遺物

図4(1~19)は、縄文時代早期から中期の土器である。1~8は、早期に属する。1~6は、丁寧にナデられており、姚或も良好で堅緻である。外面に同様の条痕を持つ土器片は、他に980g程出土している。9~11は、それぞれ1片のみの出土であり明確な時期を判断できないが、おおよそ前期に属するのではないかと思われる。12~19は、中期前半の土器である。後半に属するものは見られなかった。

図5(1~22)は、縄文時代晩期の土器である。1~9は、浅鉢である。器面は、よく研磨されていて、黒色を呈するものが多くみられた。17は、赤彩されている。

図6(1~32)は、土製円盤である。1と9には条痕がある。他はすべてよく磨かれている縄文時代晩期の土器片で作られている。6は表裏に、12は表のみ赤彩されていた。

図7(1~37)は、1、2が土器底部、3~8が弥生時代の土器、9~29が内耳土器、30~37は土師質土器である。1は、木葉痕が残されている。外面には強い指頭圧痕がみられるが、内面はナデされている。2は、3と同様の細密条痕が施されている。底面には、粗痕が残されている。

図版5の石器の最後の凹石は、昭和62年に調査された坂下遺跡において19点報告されている中世に属する石器ではないかと思われる。図版5の古錢のうち2点は寛永通寶、1点は治平元寶、1点は不明である。図示しなかったが、他に石臼、近世以降の豆などが出土している。

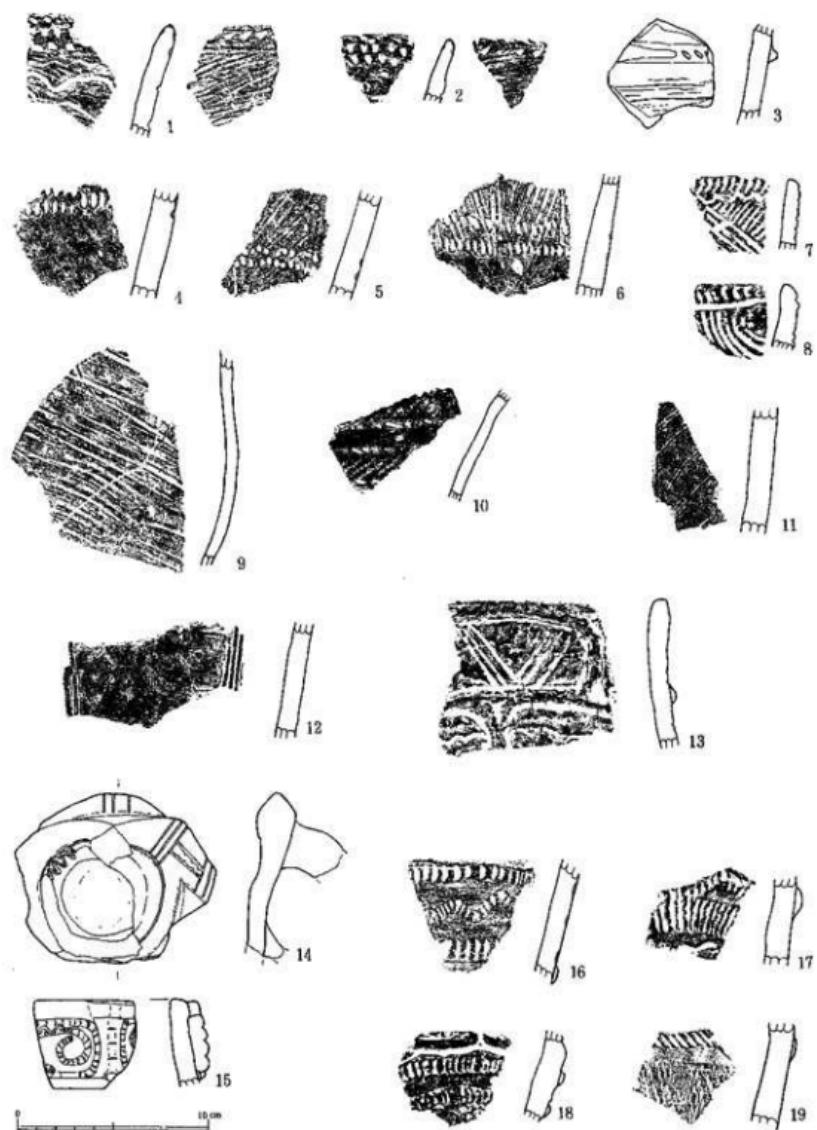


図4 通構外遺物 ① ($\frac{1}{2}$)

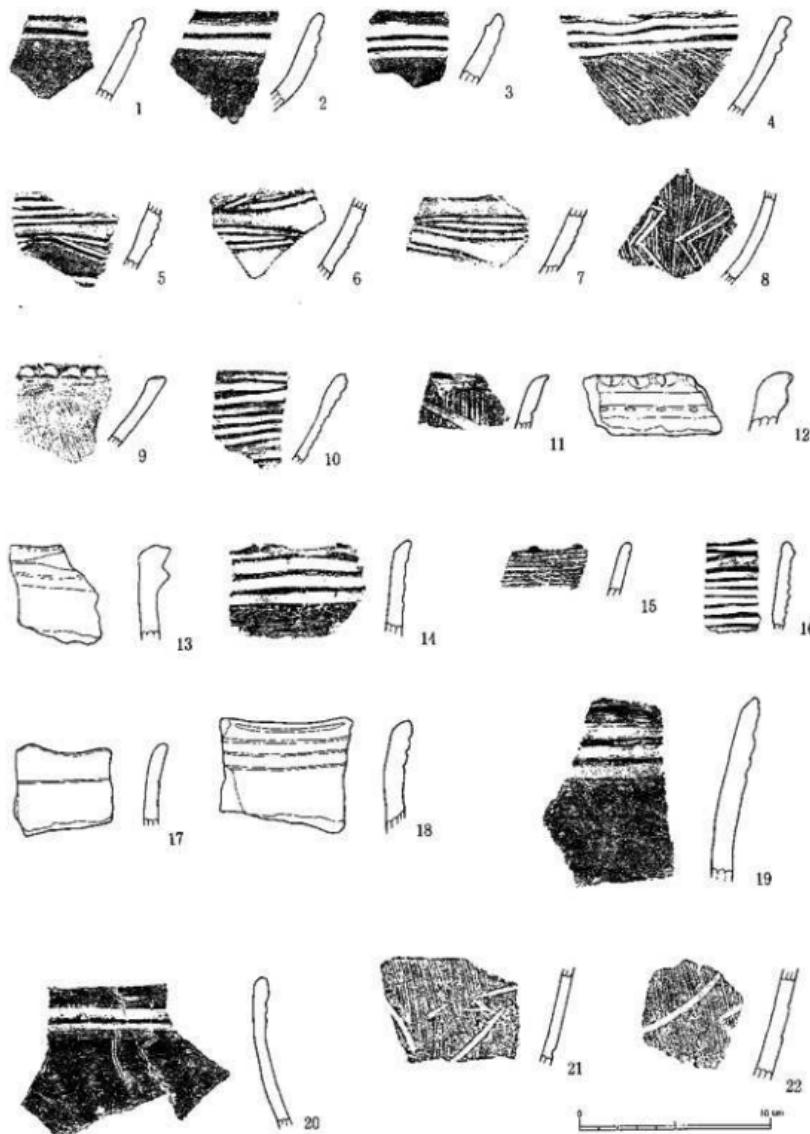


図5 遺構外遺物 ② ($\frac{1}{2}$)

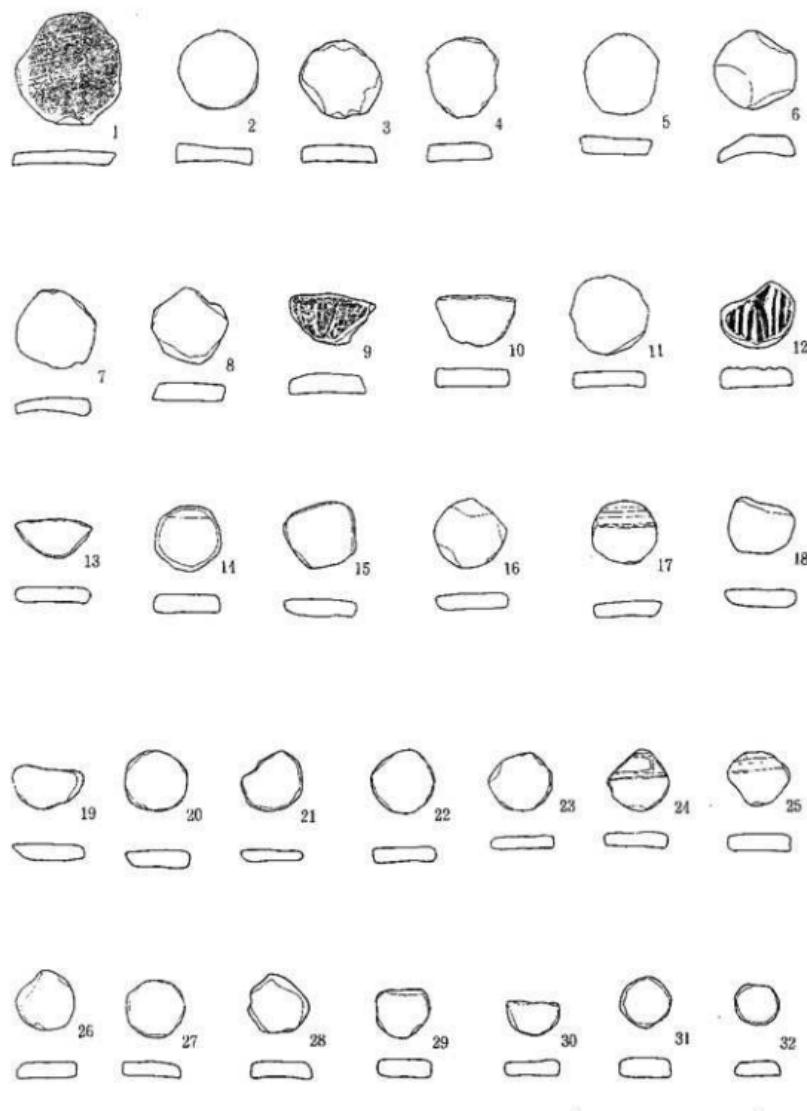


図6 遺構外遺物 ③ ($\frac{1}{3}$)

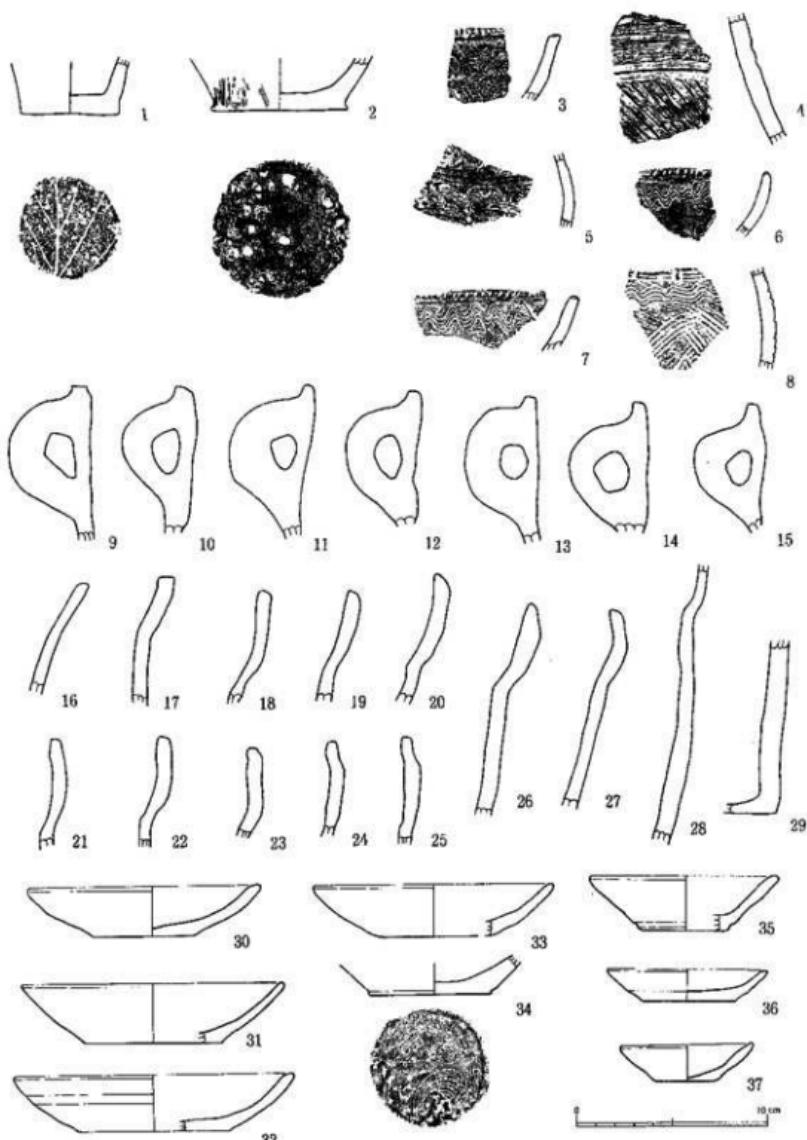


図7 遺構外遺物 ④ (1/3)

III ま と め

本調査において検出された溝状遺構は、下層の砂礫にまったく淘汰がみられず、1回の洪水によって造られたものと考えられることから、人為的な遺構は検出されなかつことになる。しかし、調査区域は遺物分布範囲の $\frac{1}{3}$ 以下であり、試掘調査によって土坑の検出されている西側は特に今後も注意していかなければならない。

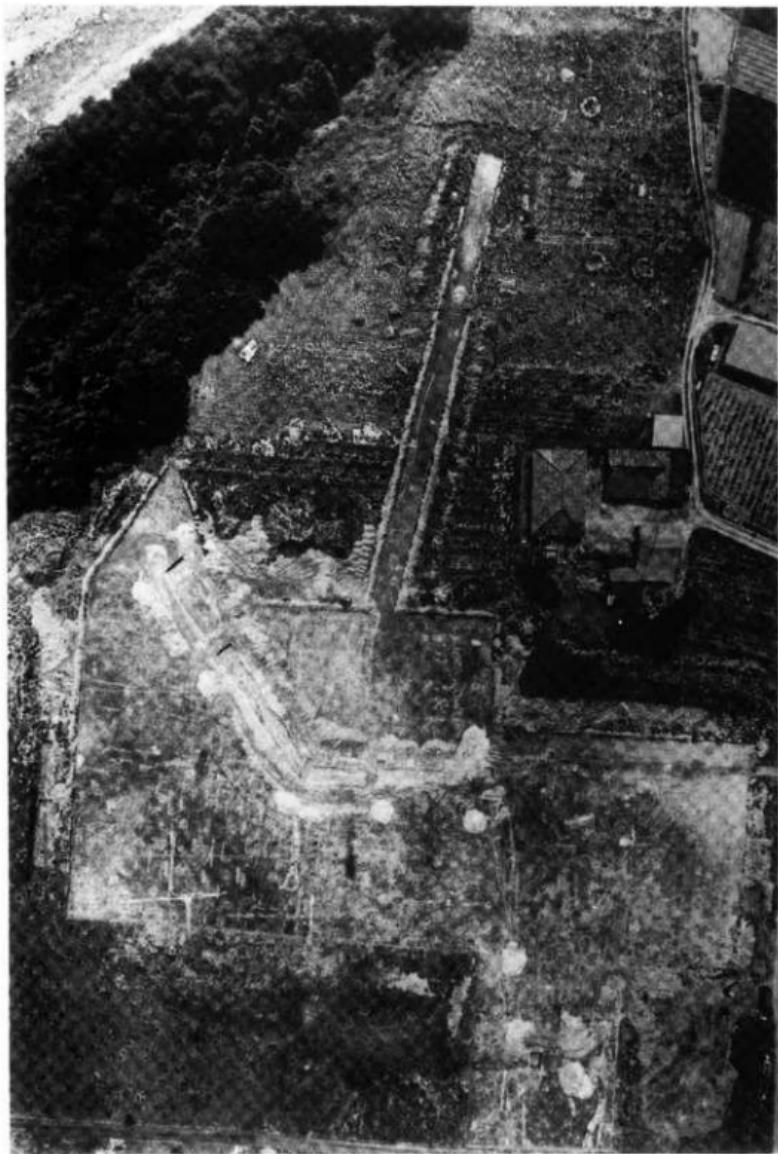
白州町内の遺跡は、平安、中世に属するものが多く、またそれらの遺跡は縄文時代前期と特に中期の遺跡と重複しているものが多い。今回出土した縄文時代早期、晚期、弥生時代の土器は、町内においてほとんど出土例のなかつたものであり、町の先史時代の空白を埋める貴重な資料である。

最後になりましたが、打製石斧や凹面、刃痕の残った土器などを届けていただいた道村建設伊藤、管谷両氏に深く感謝いたします。

参 考 文 献

- 新津 建 「白州町誌」第三編第一章 考古 1986
折井 敦 「坂下遺跡」 白州町教育委員会 1988

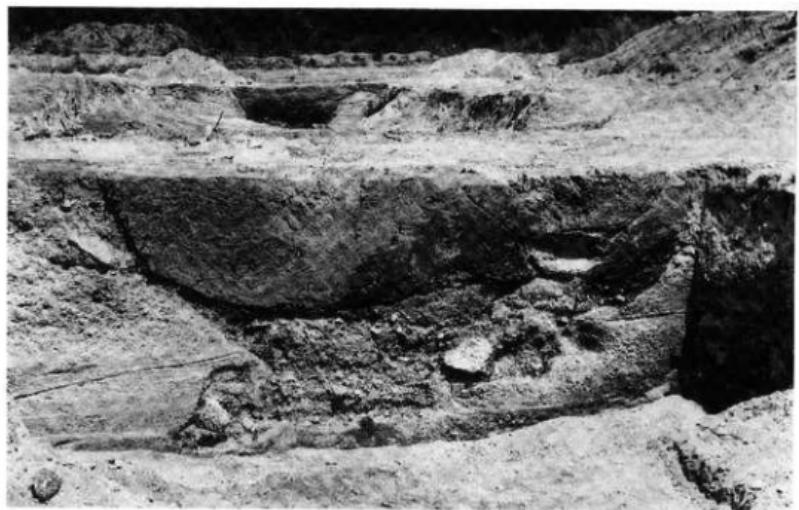
図 版



図版1 調査区全景



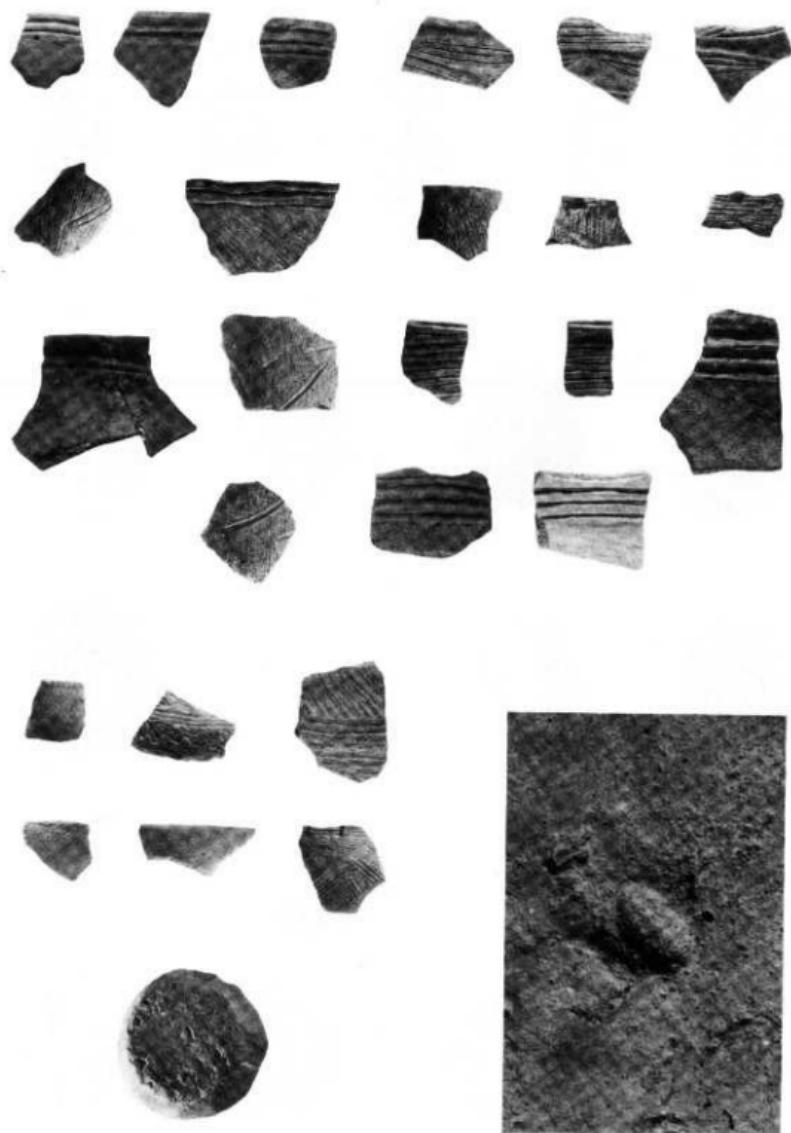
a. 遺跡遠景



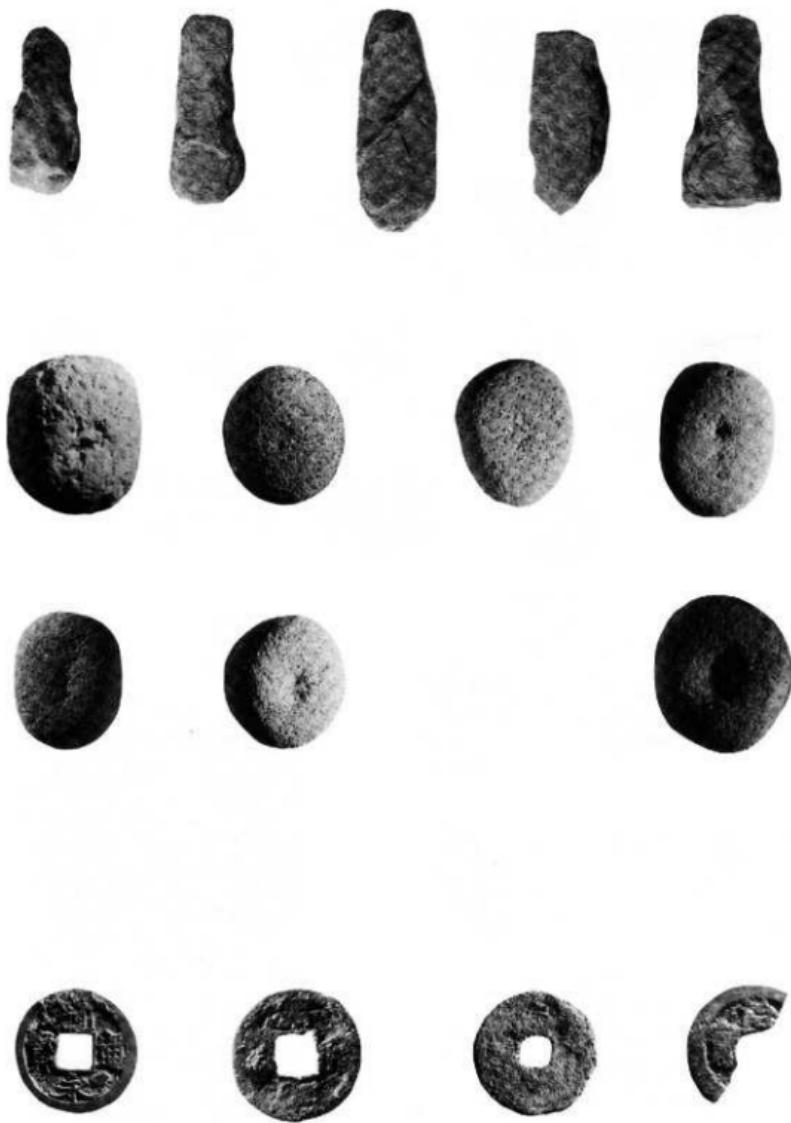
図版2 b. セクションB（前） セクションA（後）



図版3 繩文時代早期～中期の遺物 (1/2)



図版4 繩文時代晚期～弥生時代の遺物 ($\frac{1}{3}$, $\frac{3}{1}$)



圖版 5 石器 ($\frac{1}{3}$)，古錢 ($\frac{1}{1}$)

台ヶ原地区農工団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

屋敷平遺跡

印刷 平成4年2月20日

発行 平成4年2月25日

発行 白州町教育委員会
印刷 ヨネヤ印刷

